

一〇月、義堯を中心とする軍勢が滝田城を包圍した。

「わたしが和睦の使者に立ちます」

そう頷を張る美を押し留めて、一色九郎は単身、敵陣へ赴くと告げた。

「それがどういう意味か、ご存じですか」

美が睨むように質した。

「儂ひとりの命で家臣を許してもらえらるなら、こんなに安い話はない」

「ああ、だから云うたのだ。あの小さき男が、わたしのすべてを狂わせる」

「仮にも兄上を、そう悪し様に申してはならぬ」

一色九郎は一筋だけ涙をこぼして、颯爽と敵陣に下った。

そして、兵の命と引き換えに、逍遙と御級を討たれたのである。

滝田城の開城により、この年、安房国は平定された。

それは、領民の望むことでもあった。

その声に応えるため、義堯は戦乱で荒廃した地域の復興を急いだ。

免税や寺社の見舞金も惜しまなかった。在地豪族の声に耳を傾けて、よいと思ったことは積極的に決断した。

この時代の兵は、農兵が殆どである。これらを慰撫することは、次の戦さに大きな決め手となる。

（父上は日頃よりそのことを教えて下された。久留里と同じことをすればいい。いまは迷ってなどいられぬ）

里見嫡流を追い落として自らが当主となる。

これはひとつの罪だ。

が、担がれた御輿は、それ以上の答えを出さなければ、在地豪族の支持を得られない。若いながらも、そのことを義堯は熟知していたのである。

多忙の合間を縫い、滝田城の美のもとへ、義堯は挨拶に赴いた。戦場の倅とはいへ、このような仕儀となったことを、義堯は詫びずには

いられなかったのだ。

「危険ではござらぬか」

という制止を振り切り、義堯は単身、美の前に手をついた。

美は滝田城の自室にいた。

幽閉すべしという声もあったが、義堯は美を拘束しようとはしなかった。仮にも本家の血を引く眷属である。心配りを疎かには出来なかった。

従姉弟とは申せ、このときが初対面であった。殷懃に挨拶する若い義堯に、美は微笑んだ。

「権七郎殿は美によい相をしておるな。我が兄とは比べものにもならぬぞ。それに、肝も太い。よくぞ、このような場までお越しくだされた」

美は泣き言も云わず、義堯を労った。

「望まぬこととは申せ、斯く仕儀に」

「責めはせぬ。皆、兄がやったことじゃ。左衛門佐殿には済まぬ事をしたと思う」

許せと云わぬところが、美らしい。

「小さい男が人の上に立つと、皆が不幸になります。あなたは大きい男になって欲しい」

「はい」

「よい当主におなりなさい」

美はすべてを見通していた。

火の粉を払うことで、本家に代わる不義。望まぬ運命を課せられた義堯にとって、そのことが一番の泣き所だろう。

美に許されることで、如何ほどに安堵するとか。この配慮ほど、義堯を慰めるものはない。

その夜、美は涙滝に身を投じた。

年が改まり天文三年（一五三四）、宮本城に一時居を構えた里見義堯のもとへ、北条氏綱の使いが訪れた。

「里見の内乱が鎮まつたら、ともに上杉家を討とう」

という誘いであった。無論、断ることなど出来はしない。北条にとつて里見は、海の平穩のみならず、房総進出のよき盟約者であって欲しかったのだ。

「まずは目先のことを」

先のことなど考えられぬ義堯は、白黒を濁し、したたかに受け答えるのみだった。

さて、真里谷信保のもとへ身を寄せていた里見義豊らは、早くも里見内乱の子細が知られている事実には困惑しながらも、ひたすら庇護を求めていた。

里見義豊に対する真里谷家の対応はふたつあった。

信保の子・信隆は後継者として

「権七郎殿とは約定することがあり、味方を違えることも出来ぬ由。ゆえに貴方様の御身も、長くここに置いてはおけませぬ」

と、義豊を邪険に扱った。

片や信隆の弟・信応側は

「里見殿は庇護するに値する」

と厚遇を囁いたが、なんとということはない。真里谷家も割れているだけのことである。

どちらにせよ、里見と同じ諍いに巻き込まれたら、義豊の望む援軍など、到底適う筈もなかった。

「このまま歳月をおいても利はなし。決戦を挑むよりないと心得る」

義豊の決断に、従う者たちは覚悟を決めた。

決戦を挑むうえで有利な箇所はどこか。

一同は検討した。

海賊衆のない義豊にとって、沿岸での決戦は自殺行為である。ならば、拠点を奪還するしかない。

「やはり、稲村城を奪い返すべきか？」

「岡本城がよいのでは？」

諸将はこれを論じた。奪還して、更なる足場となる拠点。安房国府の至近の要害を考えれば、ひとつしかない。

滝田城。

ここを落とせば、必ず義堯は自ら出馬するだろう。

ひよつとしたら現在、宮本城にいるかも知れない。そうだとしたら、滝田のついでに攻めるまで。いや、滝田城に留まっているとも考えら

れる。だとしたら、一気に決着に及びその御級を討てばいい。

義豊は、じっと図面を睨んだ。

決戦の場は、平久里川流域の山狭がよいと判断した。そこは、犬掛から滝田にかけての平地域である。

城攻めを行う場合は、城兵の三倍の兵力を要するという常識がある。さりとて真つ向から城攻めを行えば、こちらも流血は避けられない。

奇襲に賭けるしかなかった。

十十十

犬掛へ(6)

夢酔 藤山